sweet candy rain — 1 —

花園ひろ史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

sweet candy rain111

【Nコード】

N8211L

【作者名】

花園ひろ史

【あらすじ】

一応実話をなぞった色恋モノです。

登場人物をできるだけ絞り、一人称で書きました。

いつまで続くかわかりませんが よろしく願います。

飴恋

粗悪な4、50の中年や　ませたガキに　センサー部屋を貸して
ました。

人の価値など知らない。

最終的には自分が良ければいいと　心のどっかで思っていました。

――

夏子は　浅く青い朝の残像のような　消えそうな白い月を惜しむよ
うに

「夜終わっちゃうね…」

と小さく囁きました。

僕は考えたようなふりをして　砂の地面にタバコを落として　砂を
被せて　消火しました。

僕は夏子のが好きでした。

多分　狂うほど

25にもなつて　中高生のように　胸を締め付けられる恋に　僕は
とりつかれていたんです。

121

渚 僕にとっては 妹のような かわいい存在の女の子でした。一線を越えた故 愛の混じった 友好関係です。

君は悲劇のヒロインを気取る癖がありました。

僕はあまり それが なにかどこか嘘っぽくて 好まなかったのです。

「高校のとき自殺しちゃった元カレに、毎年花を供えに行ってるの」
悲恋を語るが 相応しくない。死んだ人間に頼るのは無益だ。

今ここに存在しないし これからも存在することはないのだから。

131

周りを取り巻く環境も悪くない。

威勢はいいが どこか抜けてる大竹

プライドが高いが かなり抜けてる高倉

僕はとても二人とは仲が良かった

なにかあれば遊んでたし なにもなくても電話したりしてた。

恋愛においても 僕ら三人は悩みを共有して 情報交換したり 笑

いあつたり 悲しんだりしていた。

幸せでした。

きつと一人じゃこうはいかなかった。

今の人格も周りのおかげだ。

141

夏子は 背丈の小さい子だった。

短い黒髪がよく似合っていた。

自分のペースで生きていた。

夏子がいる そんな空間がとても僕には心地よかった。

夏子はいつも笑っていた。だから 急に真面目な顔になると僕はとても可笑しく思った。

そういう意味では 夏子の全ての表情が僕は好きだった。泣かせたくはないけれど 落ち込む姿も 僕にとっては興味深かった。

夏子は年齢よりずっと 幼く見えた。

そんな夏子が仕事の難しい話なんてすると なんとなく滑稽に思えて とても愛おしい気持ちになるんだ。

151

高倉は酔うと収集がつかない。泣き上戸ってやつだ。不満だらけの社会人生活で抑圧された陰の部分を解放するかのようにつきりつきように泣きじゃくる。

「うわああ最悪や！なんでこんな不幸なんやあ〜」

それを大抵 大竹がおちよくるように宥める。

「高倉さん。大丈夫です！高倉さんが不幸背負ってくれてるおかげで、僕は幸せです」

高倉は泣く

大竹は笑う

天秤のような二人

三人で飲めば 楽しくないわけがない。

161

渚は合コンで知り合った女の子だ。

性格はサバけて 二つ年下なんだが ずいぶんと大人びていた。

打ち解けるのも早かった。渚は話たがり、僕は聞きたがり。相性よく 仲良く 休みの日には よく食事をした。

渚には彼氏がいた。

もう五年付き合っているらしい。

しかし進んで彼氏の話はしなかった。

「結婚するんだあ……」

そんな言葉は ふわふわ宙を浮くように あまり願望深くないように思えた。

現実的な子だ。

多分この子を好きになれば 十分他の誰も目に入らないくらい 恋に落ちると思う。

けど僕は 夏子の存在を忘れることは無かった。

あまりに夏子への気持ちが強すぎたため 建前 『渚に恋する自分』 というものを作りあげ、人にはそう見られるようにした。

シーソーはたまに平衡を保つことがある。

本当の恋の辛さ

虚偽の恋の楽しさ

重さが同じ時がある

あれは横浜の街に雪の天気予報が流れた日だった。

空気は乾燥していて 吐く息も白い

夏子との出会いは なんのこともない そんな日にやってきた。

僕は関内に以前働いていたバーのバーテンダーの正吾がバーを開店するので レセプションに参加してきた。

昼はカフェ 夜はバーの瀟洒なたたずまいの店だ。

バー関係者。正吾の知り合い。開店に携わった人たちが飲みに来ていた。

昼間カフェで働く従業員も飲みに来ていた。

その中に夏子はいた。

黒く艶のある髪は ブルーライトに照らされて 異彩を放っていた。
丁寧な笑う姿に見とれてしまった。

「おー来てたのか!」

よく行くバーの社長が僕に声をかけた

「はい、正吾も店のオーナーですか…。おめでたいですね」

「まあー堅苦しいのはいいよ、あっちでゴウとかといるから来いよ。」

「あとでお邪魔します」

アルバイトのバーテンダーにジャックソーダを頼んだ。

正吾が歩み寄ってきた。

「久しぶりです！その節はお世話になりました」

「おー元気だった？川崎で働いてるって聞いたから、まさかバー開店するなんて思わなかったよ」

「夢だったんですよ。あ、スタッフ紹介しますね」

正吾はバーテンダーから順に 紹介していった。その度頭を下げ「頑張つて下さい」とエールを送った。

次にカフェのスタッフを順に紹介してくれた。

「…次は、ホールの夏子ちゃん。」

「夏子ちゃん」

「あ、よろしくお願いします」

夏子は礼儀正しく 深々と頭を下げた。

「オープンしたらカフェも飲みに行くよ。」

「待ってます。」

そんな会話が発端で 僕は夏子と出会った。

181

大竹とは話が合った。いつも 笑わせてくれるし 共通の話題も多かった。バイト先が二つも同じだったので たいていの僕の性質を知っている。

高倉は誰にも愛されてた。わがままなところも多かったが キャラ一つで今までの人生を乗り越えてきたような男だ。高倉ともバイト先が二つとも同じだった。

大竹とは大竹の恋人を

高倉とは高倉の好きな人を

同じ人を同時に狙いあったこともある。

前者は とてもミステリアスな人だった。でもとても奥が深くて魅力的だった。とっかかりが無かった僕は「このままでは負ける！」と危惧したので、『迷惑かけた後の菓子折り戦法』に打って出た。

まさかの勝利である。後に大竹から 反則とバッシングされたが

知ったものか。

後者高倉とはバイト先の女の子を狙い合った。我が道を行くようなコで 家族愛や友達愛に恵まれてて 誰からも愛されるようなコだった。

しかしその子にはカレシがいたので なかなか近づけず。それでも一緒にドライブとかしていた高倉が羨ましかった。

僕は手も足も出さず 粉砕。もう職場恋愛はしないと誓う。

そんな戦争ありつも 僕ら三人は友情を深めあってきた。

『大人』と呼ぶには まだ未熟な けど ただふざけあってる訳ではない 有益な時間を過ごした。

一つ言えるのは

『青春は長いなあ』

191

渚とは ちょくちょく会っていた というよりも飲んでいた。サザンカンフォートのトニックが大好きなコだった。渚は家族が大好き

だ 弟とだったらヤツてもいいさ言った。

渚は韓国の血を強く引いていた。

どこか他の人とは違う雰囲気を持ったコであった。

まず その働き方は尋常ではなく 朝4時に起きて 夜8時まで
病院でリハビリテーションの看護師をやっていた。それを月曜から
土曜まで、休みなく…

夜からはクラブで働いていた 週に2、3回だが 忙しい上 さらに
忙しさを求めている。『ワーキング・ハイ』という状態なのであ
ろうか とにかく僕には真似できない芸当だった。

そんな中 僕とこうして飲んでくれるなんて なんてスゴイ子なん
だろう。

爪のアカでも煎じて飲んでみたいもんだ。

渚はカレシはいつつも 他の妻子持ちの男性と不倫関係をしていた。

僕には 理解しがたいバイオリズムである。

そんな話を聞く度に 僕が付け入ることなど野暮に思えた。

僕は首を傾げていた。

車のない僕が見つけた仕事

それが現職のダスキンである。

ハウスクリーニングを主に担当していて、各家庭で換気扇やキッチン 浴室など 専用の洗剤で綺麗にした。

しかし仕事は過酷を極めた。

企業や病院からの清掃の以来が来ると 丸一日ほとんど24時間働き詰め。しかも時給換算ではないので 報酬比例のため 24時間働いても 一回分の日給。

割に合わない。

しかし 周りのみんなが

「頑張ってるね」

「すごいね」

と褒めてくれると 単純な僕は 頑張る気になれた。

それに思いつきり働いた後の酒は格別だ。

渚が僕にプレゼントがあると いつものバーに呼び出された

LUSHのハンドクリーム

洗剤で荒れた僕の手を気にして プレゼントしてくれた。

僕は素直に喜んだ。

渚の優しさに微笑んだ。

— 1 1 1 —

夜勤明けは 大抵 昼間は休みである。

正吾のカフェに行ってみよう。

あの子にも会ってみたい。

僕は初めて会った時から 夏子のこと頭から離れなかった 仕事をしても 友達と遊んでも

ブルーライトで照らされた 引力の強い瞳が いつも脳裏に浮かんでいた。

正吾の店は 鎌倉街道沿いの建物の2階にある。

ドアにはベルが垂れ下がっていて 開けると カランカランという音がした。

カウンター席 8席

テーブル席 4席

ソファー 1席

関内の立地では そこここ広い敷地であった。

朝の10時から夕方の6時までカフェ

夕方の6時から朝の3時までがバーというスタイルだ

店全体は北欧の家具や 照明が飾られていた

掛かっている絵画も 抽象画のようなものが多かった。

店に入ると カフェの主任らしき人と業者らしき人がテーブル席で話をしていた。

一般客はいなかった。

開店して一ヶ月ほどだし まだまだこれからというところだろう。

ウェイターに案内され カウンターに座った。

サイフォンでコーヒーを沸かす後ろ姿。夏子だ。

夏子は コースターを差し出して

「いらっしゃいませ」

と笑顔で言った。

「どつ調子は？」

僕は素直に聞いてみる

夏子は「はっ」とした顔をした。レセプションで会ったことをどつやら思い出したようだ。

「お久しぶりです。気づかなくて…（笑）」

「いや、挨拶しかしてないもんね」

「今日お仕事は？」

「休みだよ」

「あつ、これメニューになってます」

「ありがとうございます、アイスコーヒー」

「はい、」

夏子はサイフォンに戻り コーヒーを沸かしはじめた。

後ろ姿は 華奢で とても女の子っぽい

少しまだ たどたどしさが 残っていた。

アイスコーヒーを待ってる間、タバコを一本火をつけて カウンターの中を見渡した。

ウェイターと 夏子の二人

多分業者と話してる主任のような人は カウンター内では働いていないだろう。打ち合わせといった感じである。

二人体制でやってるのは やはりまだ繁盛していないからだろう。席が余って 店が広く感じた。

「アイスコーヒーお待たせしました」

1121

高倉は仕事で電話に出ない

大竹は彼女とデート

暇だ

なんとなく仕事にも慣れてきたが やはり労働環境が悪い。

上司や同僚は 悪くはない人たちなんだが

こっちは生活がかかってるわけで…

仕事やめたい病

早く免許も欲しいのに こんな労働時間じゃ 試験場に行ってる暇がないや。

けど 情性に働く。少しは金になる。渚も応援してくれる。すぐ辞めたら今までと同じだし…

高倉は毎月しつかり20万もらって いい会社に勤めてる。うらやましいなあ

大竹は来年の4月から 就職も決まり 今は遊び放題 これもまた羨ましい。

僕はこれでいいのだろうか。

— 1 3 —

今日は渚とデートだ。まあ横浜でデートといっても 桜木町ぐらいしかない。ドライブできないのが痛いところだ。

渚は良く食べ 良く話す こっちの箸が進まないくらい。

「おいしいもの食べてる時が一番幸せ」

なんて いかにも女の子っぽいことを言う。

渚 君の時間はどこで止まっているの？

渚 君は何でそんなに焦ってるんだ？

渚 君は僕に何を隠しているの？

たまに俯く渚の姿が僕にそんな問い掛けをさせる。

人には入られたくない心の奥の方が 暗くて見えない。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8211/>

sweet candy rain - 1 -

2010年10月15日17時35分発行